

知の泉

滋賀の大学 研究最前線

滋賀大学

データサイエンス学部

Shiga University
Faculty of
Data Science

01

「情報を科学するデータサイエンス」 データが持つ 力を解き放つ。

膨大なデータから価値を創造する科学「データサイエンス」が注目されている。IoT／ビッグデータ時代の新知識は、情報を「宝の山」に変えていく。

データから価値を創造する データサイエンス

近年の情報通信技術や機器の進化によって、大量のデータが生成・集積されるようになった。いわゆる「IoT／ビッグデータ」時代が到来しており、ビジネス界では、集まったデータを生かせることが優位になりつつある。Amazonなど欧米のネット企業はその代表格で、データを元にしてクライアントに最適化されたサービスは、多くが知るところだろう。「あなたにおすすめの商品」これを購入した人は、こんな商品も」レコメン

ドの裏側では、膨大なデータが解析され、個人ごとの属性に合わせてメッセージが自動で送られるようプログラムされている。日本でもデータをビジネスに生かそうとする動きがあるが、欧米に比べると遅れているのが現状だ。その理由のひとつが人材不足。滋賀大学データサイエンス（DS）学部長の竹村彰通教授は「日本

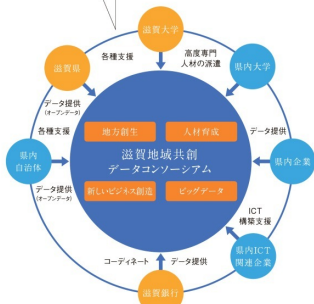
は、データサイエンスといえる専門家が圧倒的に足りない」と警鐘を鳴らす。あらゆるデータが蓄積されていく今後は、ネット通販に限らず、どの企業、どの分野でもDSの必要性が高まるのは想像に難くない。実際、データを活用できるデータサイエンスは、ビジネス界をはじめ、医療、教育、行政などあらゆる領域で求められているという。無秩序に並ぶ膨大なデータ群の中から、隠れた法則性や因果関係を見つけて出すのは容易ではない。裏を返せば、データから独自の知見を引き出すことができれば、新しい価値が生まれる可能性は大きい。

地方創生に向けた構想、 滋賀をDSのシリコンバレーに

本質的にグローバルな視野を持つDSだが、滋賀県内では、地方創生を目的にDSを活用する取り組み、滋賀地域共創デー

滋賀地域共創データコンソーシアム（仮称）

滋賀県内の産・学・官・金を中心に構成、集まったビッグデータの活用を通じて、新しいビジネスやサービスを展開するなど、地方創生に直結するような施策を打ち出していく。



タコンソーシアム（仮称）」の構想が進められている。これは、県内の企業をはじめ大学、自治体、地域金融といったいわゆる産・学・官・金が連携して保有するデータを持ち寄り、滋賀大学DS学部のノウハウ提供を受けながら、地域の課題解決や新たな価値創造をめざすというもの。「将来的には、滋賀がDSのシリコンバレーと呼ばれるような地域になれば」と竹村教授。コンソーシアムの取り組みを進めることで、若いデータサイエンスが集まる土壌をつくり、そこからさらに技術革新が生まれる好循環も期待される。